

養成校における“子育て支援”に関するとりくみ

-その意義と課題-

澁谷 由美、古川 洋子
愛知学泉大学

The Approaching Project of “Child Care Support” in Nursery School and Kindergarten Teachers Training Course

- Focusing on the Directions and Problems -

Yumi Shibuya, Yoko Furukawa

キーワード：子育て支援 Child Care Support、養成校 nursery and kindergarten teachers、
体験学習 experiential learning

1.はじめに

少子化や核家族化、晩婚化、ひとり親家庭の増加などに伴い、子どもをとりまく環境が大きく変化している。そのような環境のもと、地域のつながりが希薄化し、家庭における子育ての負担や不安を感じている保護者が増加している。このような現状の中、保育所保育指針の改定に関する中間とりまとめの中では、次のように示された。

「保護者と連携して子どもの育ちを支える」視点を持って、子どもの育ちを保護者とともに喜び合うことを重視するとともに、保護者の養育する姿勢や力が伸びていくような、保護者自身の主体性、自己決定を尊重した支援を行うことが重要である。3歳になるまでに質の高い保育を受けた子どもは、そうでない保育を受けた子どもに比べて、知的能力と言語発達とで差が見られるが、その影響の度合いは保育施設よりも家庭の影響が大きい、という海外の調査研究結果もあり、こうしたことから子どもの育ちを保護者・家庭と連携して支援していくことが重要と考えられる。¹⁾

ここには、保護者への対応力は、保育者に求められる資質であると明示されている。保育者養成校において、子育て支援活動を体験することこそ、保

育者を目指す学生にとって意義あることだといえよう。

本研究では、本学における「げんき館」でのとりくみ（2015、2016年度）の経過を検証・考察することを通し、養成校における“子育て支援”活動のとりくみについて、その意義ならびに今後の課題を検討する。なお、本研究は筆者の先行研究^{注1, 2, 3)}を展開させながら進めている継続研究である。

2. 2015年度の活動

本学こどもの生活専攻の学生は、「岡崎げんき館（岡崎市PFI事業）」において、2009年より、「学泉のお兄さんお姉さんとあそぼう」の活動にとりくんでいる^{注4)}。げんき館の活動については、年間を通して年度のはじめに計画する。2015年度の活動は9回実施され、すべて1年生が担当した（表1参照）。

(1) 学生の取り組み

1) 活動の前に

一年生の学生は、前期に行われる保育内容総論の授業において、地域における子育て支援の必要性について学ぶ。主に、各自の居住地域で行われている子育て支援活動についての調査から学びを深める。そのなかで、必ず学生に次の話を伝える。「かつては大家族で子どもの頃から身近に乳幼児がおり、乳幼児と接する経験や、乳幼児に関する必要な知識を獲

得できた。その経験が、親となり子育てを始める時に役に立つ。しかし最近では、赤ちゃんを抱いたこともない女性が母親になるケースが増えている。その結果、育児不安につながる母親もいるようだ。」と。多くの学生は、この話を聞き驚く。子どもが好きだからという理由で保育者を目指す学生にとって、不安を抱えて子育てをしている保護者の存在を理解することは難しいようだ。

そのような学生に、保護者への対応までもは期待できない。しかし、げんき館の活動を体験することを通し、地域で展開されている多様な子育て支援の現状について、まずは関心をもってもらいたいとの願いをもっている。

2) 活動内容

十分とは言い難い準備を経て、活動の日は訪れる。2015年度の9回分の活動を表に示した。活動時の写真を併せて掲載する。

げんき館での活動は、実施前に現地で1時間ほどの練習の時間があり、その後30分ほどの活動を行う。活動の後は、参加した親子と一緒に30分ほど一緒に遊んだり保護者と話をしたりなど、ふれあう時間をもつ。表には活動の内容のみを表している。

表1「学泉のお兄さんお姉さんとあそぼう 2015」

日時	活動内容
8/6	<ul style="list-style-type: none"> ・手遊び「アンパンマン」 ・リズム遊び「勇気りんりん」 ・パネルシアター「バスにのって」 ・リズム遊び「バスごっこ」
8/20	<ul style="list-style-type: none"> ・手遊び「とんとんとんとんひげじいさん」 ・パネルシアター「ひよこちゃん」 ・大型絵本「へんしんトンネル」 ・リズム遊び「ハッピージャムジャム」
8/27	<ul style="list-style-type: none"> ・リズム遊び「あたまかたひざぼん」 ・パネルシアター「いいとこいいとこ」 ・手遊び「ぐーちょきぱーでなにつくろう」 ・学生と触れ合いあそび「さかなつり」「ボーリング」「ボールいれ」
2/25	<ul style="list-style-type: none"> ・パネルシアター「ひよこちゃんのいいな いいな」 ・リズム遊び「わーお！」 ・学生と触れ合い遊び「さかなつり」「わなげ」

3/3	<ul style="list-style-type: none"> ・手遊び「ぐーちょきぱーでなにつくろう」 ・大型絵本「のりものいろいろかくれんぼ」 ・紙芝居「おおきくおおきくおおきくなあれ」 ・リズム遊び「バスごっこ」
3/17	<ul style="list-style-type: none"> ・クイズ「動物たちのかくれんぼ」 ・大型絵本「びよ〜ん」 ・パネルシアター「大型バスにのってます」 ・リズム遊び「バスごっこ」
3/24	<ul style="list-style-type: none"> ・手遊び・手遊び「とんとんとんとんひげじいさん」 ・大型絵本「はじめまして」 ・ペープサート「おむすびころりん」 ・パネルシアター「ひよこちゃんのこんなになっちゃった」



写真1 2016年3月3日 げんき館にて



写真2 2016年3月3日 げんき館にて

(2) 学生の感想

ここに、活動後に自由記述から得られた学生の感想を挙げておく。

- ・ 1、2歳の子どもの好きなアンパンマンが登場する内容を選んだ。一緒に歌いながら踊っているとき、親子で楽しそうだった。最初は恥ずかしかったが、自分も楽しむことができた。
- ・ どんなことをやれば楽しんでもらえるのか考えて計画

したが練習不足だった。でも、子どもの反応が嬉しくて、考えていなかったこともやってみた。子どもの前だともっとやってみたいと思った。

- ・ 図書館に行って大型絵本を探しました。みんなでどんな絵本を読むか何度も相談して決めました。思っていたより子どもが喜んでくれたので、嬉しかったです。子どもの様子がわかったから、次の時は子どもやお母さんと一緒に楽しめる活動をやりたいです。
- ・ 魚釣りゲームをしているとき、お母さんが「いつもは私から離れないのに今日は楽しそうにしている」と話していた。何度も魚をつって嬉しそうにしている子どもの様子をお母さんが写真に撮っていた。お母さんも喜んでくれてよかった。
- ・ バスごっこの時、お母さんが子どものために体をあんなに動かしてやるとは思わなかった。お母さんのほうが積極的だったからびっくりした。音楽にあわせて体を動かす遊びを覚えたい。
- ・ 活動がおわったあと、ボールを転がして女の子と遊んだ。お母さんのおなかが大きくて、外で遊ぶことができて家の中ばかりだからげんき館に来て、お姉さんに遊んでもらえてよかったと言われた。赤ちゃんを連れてきているお母さんもたくさんいたから、げんき館は子育て中のお母さんが来やすい場所だと思った。

(3) 分析と考察

前半(8/6 8/20 8/27)に参加した学生が、げんき館の活動について報告をする機会を後期の授業の中で設けた。学生の感想にもあるように、繰り返し活動への参加を希望したいと報告した学生が多かった。

何人かの学生は、「子どもが学生さんと一緒に遊ぶことを楽しみにしているから毎回きています」など、保護者から話しかけられたようだ。そのような言葉によって学生のモチベーションは保たれる。なかには、保護者とうまく話せるか不安な気持ちを抱きながら活動に参加する学生もいる。しかし保護者とのいくばくかの会話は、我々の想像以上に彼らの意欲につながるようだ。

また、学生からは、楽しみにしている子どものために、もっと内容を考えて活動に参加すればよかったと反省する内容の報告もあった。このような学生の感想は、実際に体験しなければ得られないものであろう。

前半に活動した学生の報告を参考にして、後半(2/25 3/3 3/17 3/24)に参加する学生は、活動内容

を再考し、変更するグループもあった。また、後半に参加するグループの練習に前半の学生も加わり、学生間で育て合う姿が見られた。前半の学生が、「もっと大きな声じゃないと聞こえないよ」「その言葉じゃ、子どもに伝わらないよ」「絵本読んだとき、子どもが前にきて困った」「そこに立つと、子どもに見えないよ」などと体験から得た各自の思いを伝える。それらのアドバイスを受けながら、後半に参加する学生は活動にむけて取り組んでいる。そのような姿は微笑ましく、今後に期待を持てるほどである。

活動に参加する前の学生は、「間違っではいけない」「しっかり発表をしなければいけない」と考えていたようである。また、活動イコール成果発表の場として考えている学生が多かった。

げんき館に集まってきた学生の姿は、とても緊張している。しかし、活動が始まり親子が積極的に活動に参加する姿を目の当たりにした途端、親子の姿によって学生の心は解放され表情が豊かになる。そして練習以上の力が発揮される。親子と直接的な関わりを体験する中で、一方的な成果発表の場ではなく、参加する親子のことを考慮しながら、つまり双方向を意識して、活動内容を計画することが重要であることに気づいていく。

また、子育てをしている母親にとって、気楽に子ども連れで出かける場があることは非常に心強いことだと、活動を通して学ぶことができたようである。実際に親子と触れ合い、姿を見て様子を探る中から得られる、得難い経験である。

3. 2016 年度の活動

2016 年度の活動は 9 回実施される予定である。前年度同様、夏休みと春休みの期間に行われる。

(1) 活動の再考

前年度の活動を振り返り、我々は問題点をあらいだした。2 つの大きな問題が共有された。ひとつは、げんき館活動そのものは有効であるが、学生らは課題を見出しても振り返る機会を得ないこと。また、9 回の活動実施日が夏休み中と春休み中とに分かれており、それぞれの取り組みに時期的な問題が生じること。以上ふたつの問題は、それぞれ次の問題を内包している。振り返りの機会を得るには、繰り返しの経験をさせたい。しかし、人数的な問題もあり(2015 年度 1 年生は 75 名)、全員に体験させるには

1 回の参加がせいぜいである。機会均等を考慮したいが、活動日は決まっているため、夏と春とに分けねばならない。

夏に出向く学生は、夏休み前に活動の準備を完了させねばならず、入学間もない学生に、子育て支援そのものの理解をさせた上での準備は困難を極める。一方、春休みに出向く学生は、夏の反省を生かした活動ができるという点で、すでに夏に活動した学生と比べて均等な機会を得ているとは言い難い。

また、夏に活動した学生は、活動後に反省をする時間や機会を多く有するにもかかわらず、再考して再度試す機会はない。反省は別の学生に委ねなければならないのである。春に活動した学生は、その活動を振り返り、再考したとしても、次に実践する場はなく、彼らのモチベーションを次につなげることが困難である。教育的にあまり良い状況とは言えない。

さらに問題は多岐にわたる。どちらの学生も、授業のない休み中のボランティア活動ゆえ、学生によっては遠方から多額の交通費を払って参加せねばならず、負担を強いる。また、休み中の活動ということを理屈では理解していても、実際の取り組みには練習や準備が必要である。しかしながら、その機会を得ないまま取り組みが実施される場合も見受けられ、それは学生にとっても参加者にとっても不利益である。

(2) 取り組み

(1)に示した前年度の反省を生かし、今年度は前期の授業を利用し、1 年生全員を引率して先づげんき館の見学を実施した。

げんき館での活動は、見学を終えた後に実施される。

1) 事前の取り組み (げんき館見学)

見学は、げんき館そのものの周知を図るとともに、その一部で行なわれている子育て支援の取り組みを学生に知らしめることができる。子育て支援とは何かを含め、どのような人が利用するのか、利用者はどのような目的で訪れるのかなど、施設の方に話をしてもらった。

学生には、各自のメモを参照して、訪問した感想・その場では聞けなかった質問など、自由記述でレポートさせた。

2) げんき館活動

今年度の1 年生は学生数が少なく(44 名)春休み中の活動のみに振り分けることが可能であったため、夏の活動はすでに経験した上級生を募集した。

1 年生は、時期を夏と春とに分けるより、入学後の1 年

を通して学んだことを活動に生かすことができるという点でも、また学生の機会均等を考慮した上でも、春休み中の活動は有効である。また、上級生は一度経験済みのげんき館活動を再度行えるという点で、振り返りの機会を得ることができるだけでも貴重な経験となる。

ここでは現時点で終えている、上級生による活動について取り上げる。夏の活動は、8/4 8/11 8/18 8/25 に行われた。

3) 活動内容

2016 年度のすでに終了している 4 回分の活動を表に示す。

表 2「学泉のお兄さんお姉さんとあそぼう 2016」

日時	活動内容
8/4	<ul style="list-style-type: none"> ・手遊び「ぐーちょきばーでなにつくろう」 ・エプロンシアター「ねずみの相撲」 ・大型絵本「ぴよ〜ん」 ・パネルシアター「いろぬり動物園」 ・リズム遊び「バスごっこ」
8/11	<ul style="list-style-type: none"> ・手遊び「パンダうさぎコアラ」 ・リズム遊び「バスごっこ」 ・クイズ「なんの動物でしょうか？」
8/18	<ul style="list-style-type: none"> ・リズム遊び「バスごっこ」 ・クイズ「この生き物わかるかな？」 ・遊び歌「大型バスにのってます」
8/25	<ul style="list-style-type: none"> ・手遊び「一本と五本で」 ・大型絵本「トンネルをぬけると」 ・歌「ふしぎなポケット」 ・手作り絵本「ポケットの中には・・・」

(3) 学生の感想

・ 一年生の時は、グループで保護者と子どもの前で活動をし、残りの時間で子どもと触れ合うという感じだった。正直、この時はまだ実習を経験していないのでどのように関わっていけばいいかわからず、戸惑う場面がいくつもあった。他にも、保護者と子どもの距離が近く、自分たちが入る隙間がないとすら感じてしまった。今回は、実習を経験していることもあり、人の前で活動することに緊張をあまり感じず、楽しく子どもと保護者との活動が出来たと思う。言葉かけや一つ一つの動作も一年の時と比べ、良い動きができていたと思う。残りの時間も一年の時はどうしたらいいかわからない所があったが、

今回は自分から子どもや保護者との距離を縮めようと行動することができた。

- ・ 一年生のときは子どもや保護者と関わる経験がほとんど無く、とても緊張してしまい自分の役割をこなすことで精いっぱいだった。うまく子どもや保護者と触れ合うことができず、何とも言えない気持ちだった。今回のげんき館は実習を経験してきたことで子どもの姿をイメージできるようになっていたと感じた。メンバーと相談し合い、パネルシアターの内容も子どもの年齢に合わせて工夫し、これぐらいなら理解できるだろうと想像をすることができた。また、子どもたちの集中力を考え、一つの出し物の時間や見て楽しむ活動と体を動かす活動の順番にも配慮できるようになった。そして、子どもたちの表情を見たり子どもや保護者と楽しく関わる余裕を持つことができた。
- ・ げんき館の活動は、保育園の保育などとは違い、家庭で過ごすようにゆったりとした雰囲気を意識することも必要だと感じた。子どもの楽しむ姿を見ることで、保護者も自然と笑顔になり、一緒に楽しめていたと思う。げんき館の活動に参加して、一年次よりも楽しかったという思いがある。やはり、自分にできることが増えたということが一番大きいのではないかと感じる。実習や保育園でのアルバイトの経験を生かし、子どもや保護者と関わることで達成感がある。
- ・ 前回は活動後にずっと同じ子どもと遊んでいただけでしたが、今回は自分から積極的に子どもに近づき、いろいろな子と遊ぶことができました。
- ・ 一年の時と比べて緊張感なく落ち着いて接することができた。前回は保護者から離れない子どもに苦戦したが、前期の授業で子どもの内面的なことを学んだおかげで困惑することなく子どもに接することができた。
- ・ 前回は自分たちの活動のことで頭がいっぱいだったが、今回は発表をしながら子どもたちや保護者の方たちの様子まで意識を向けて観察できた。同じ年齢でも、私たちに興味を持って話しかけてくれる子どももいれば、保護者にべったりで話しかけても隠れてしまう子もいて様々だ。講義で聞いた、子ども一人ひとりに丁寧に関わり、

その子に合った保育をすることが必要だということに改めて学んだ。

- ・ 今回は友だちに誘われて参加したが、いろいろ学べた。子どもたちが知っていた手遊びや歌と一緒に楽しんだ。やっぱり歌って大切だと気がついた。もっといろいろなことを覚えたいといけないうし、喋る力もつけたいと思った。またこのような機会があれば参加したい。
- ・ 前回は授業の中でいろいろ準備して活動したが、今回は自分たちで集まる時間を作ったので発表だった。何をするかも曖昧なまま当日になった。準備不足のまま当日になり、当日の練習だけで本番に挑んだ。流れもスムーズにいかないし、歌の一部を忘れて止まってしまったり、散々だった。練習をしてむかうのはすごく大切だ。
- ・ 1年生の時は、子どもたちに見せるだけに集中してしまい、子どもの姿はまったく見られず、活動後も自分から子どもに声をかけられなかった。それを後悔していたので今回はそれらを克服することを自分なりの課題にしていた。今回は子どもの姿を見ながら活動できた。また、活動の準備をするときに友だちの意見を聞くだけでなく、私自身がやりたいことをハッキリと言えるようになったので良かった。
- ・ 前回の反省を生かし、子どもの目線で話すことや声の大きさなどに注意して活動した。失敗や反省点が見えたり、前回から改善してうまくいったことがあったり、次につながるの経験で積み重ねることが大切だと感じた。
- ・ 前回とは違う人たちと活動しないといけないうので、自分たちで時間を見つけて話し合いを進めた。それぞれの経験を生かして話し合いを進めることができた。子どもにも保護者にもわかりやすく楽しんでもらうことを、相手の立場に立って考え、計画することに心がけた。活動当日もフォローし合い、無事に成功させることができた。ほんの数ヶ月の中で、授業やボランティア活動を通して、私たちは少しずつでも成長できているのだと思った。さらに成長していくためにも、ひとつひとつの授業をしっかり受け、いろいろなことを経験して学んでいくことが大切なのだと思う。
- ・ 初めて子どもの前に立ち、クイズを出す体験をしました。全力の笑顔と楽しそうに大きな声と

大きな動きを心がけました。子どもたちがお母さんお父さんと楽しそうに参加してくれている姿を見てとても安心しました。去年は発表が終わった後子どもと遊ぶ時間があっても、子どもたちがたくさん集まる場所には行かず近くにいた親子と自分の友達とおしゃべりしていましたが、今年は一人で子どもたちの集まる場所へ行き、子どもと楽しくおしゃべりをしながら遊びました。去年の活動から1年たち、子どもと関わる自信がつき、子どもが好きな気持ちが大きくなったかなと感じました。

- ・今回感じたことは、自分から進んで子どもと関わったり、声を積極的にかけたりすることで、有意義な時間に行うことができるのだと気付きました。また、自分から積極的にこういう機会を利用し活動することで、子どもと関わる練習や子どもの動きなどを自分の目で見ることができ、自分にとって大切な経験だなと感じました。後期からは実習も始まるし、実習に向けて日頃から意識して授業にも取り組みたいです。
- ・1年の時は何もやらずにクラスの子に任せっきりでいた。しかし、突然「最初の挨拶とか司会進行をお願いしたい」と言われて、自分なりに精一杯やってみた。今までにないくらい緊張して、発表が終わり友だちに「お疲れ様」「上手だったね」と言われると泣きそうになった。私には難しいと思っていたが、皆にはたらしかけながら進行していくのは楽しいものと感じた。
- ・活動の後、子どもたちと一緒に遊ぶ時間に、1年生の時はどうやって関わればいいのかかわからず、同じグループの人が子どもたちと遊んでいるところをただ観察していただけでしたが、今回は、どうやって声がけをしたら子どもたちが寄ってきてくれて一緒に遊んでくれるのかをよく考えて前みたいなことにならないように努力しました。活動は、練習不足で保護者や子どもたちに申し訳ないと思いました。これからはこのようなことがないように気を引き締めていきたいです。
- ・良かった点や反省点、改善点など将来に役立つ点がたくさん見つかった。実際に子どもたちの前に出て主になって活動できたことや、これまでの授業を通して得た知識を活かすことができた。

また、子どもたちに自分の意思を伝えることの難しさなど改めて実感することができ、自分のことを見つめ直すいい機会になった。

- ・今回いちばん感じたことは、1年生の時よりも人前で話すことへの抵抗が減ったことだ。昔から人前に出ることが苦手なので。今までより人前で話すことが平気になっていることが成長したと感じた。
- ・今回の活動で、準備不足がいかにも現実で通用しないかを思い知った。「二回目だから大丈夫」「なんとかなる」という考えで努力をせず活動したのは今思えば慢心だった。そんな中、仲間は笑顔でやりきっていた。これが日頃の意識の違いなのだと、自分の未熟さを改めて強く認識した。

(4) 分析と考察

8/4 8/11 8/18 8/25 に行われた活動のうち、8/4 は4年生が、他は2年生が取り組んだ。日によって活動した学生の人数もまちまちであった。8/4 は6名、8/11 は12名、8/18 は6名、8/25 は4名である。ほとんどの学生は自主的に参加を希望した者であり、今までの経験を活かし自分たちで計画を立て活動にのぞんだ。彼らの多くは、1年時には保護者の存在そのものに緊張していた学生である。2度目となる今回は、保護者との関わりを求めて参加していることは特筆に価する。

4年生は1年時のげんき館活動に加え、実習も経験し、そのうえでの活動である。自主的というよりは、保育系の卒論を書いている学生にこちらから参加を促したため、さほど参加に乗り気でない学生も混じっていた。しかし、参加後には各自が活動の意義を感じており、それぞれに学ぶことがあったようである。

2年生は、教員サイドから個別に参加を促した学生はいない。あらかじめ活動日が決まっていたため、物理的に参加可能な者が活動した。希望の意思はあっても、日程的に調整が不可能で参加を諦めた学生もいた。

回収した感想から、自らの意志というよりは、友だちの誘いで参加した学生もいたようである。しかし参加したすべての学生に、何かしら得るものがあったことが彼らの感想にうかがえる。

ただし、それぞれの対応を要するいろいろな子どもがいることを彼らが学びとったように、学生もまたさまざまなことを彼らの感想は教えてくれる。ある学生は、前回の活動に反省と課題を持ち、再挑戦すべく参加を決めたようである。一方、子どもの笑顔を見たい一心で参加

する学生もいる。個人的な課題を持って活動する者もいれば、話し合いを重ね、各自の反省を出し合い、切磋琢磨することに意味を見出す学生もいる。

個人差はあるものの、参加した学生は皆、げんき館でのとりくみを、その場限りの活動とせず、それぞれの学びや今後へつなげたいという思いや願いを持っている。

また、活動に至るまでの各自のとりくみ、すなわち授業やボランティア活動、サークルやアルバイトを含め、それらが彼らの内で結びつき、活動となって現れ出ることを感得している。

彼らの感想には、活動を通して得たことが言葉として紡がれており、その言葉に彼らの成長を垣間見ることができ、頼もしく思う。

2016 年度の夏の活動が各自にとって2度目となった学生は、初回の反省を生かすよう各自に工夫が見受けられ、活動した彼らのみならず、参加者にとっても有益なひと時を持てたと考えられる。

ただし、2 度目であるという安心感から、例えば準備に甘さが出る等、緊張感をなくした行動が見られたことも事実である。準備不足のまま活動することは、自分たちにとっていかに危険なことか、かつ参加者に対していかに失礼なことかを感得することができ、別の反省を促すことになった。それはそれで、新たな体験であり、実践なくしては得られぬことであった。

4. 意義と課題

ここに報告した 2 年間の活動に見られるように、学生は経験によって感得ないし体得し、それぞれの学びを深める。その経験にこそ大きな意義がある。言わずとしれず、経験すること自体に加え、経験を積むなかで学生が自ら疑問を抱き課題を持つことによって彼らは成長する。さらに、疑問を払拭し課題を遂行しようと次の一步を踏み出す力を、学生自らの内に蓄える。その蓄えを、行動に移す原動力に変えて彼らはさらに成長する。その循環を我々教員は内外から援助するほかない。

今年度に残されたげんき館活動は、前期の見学を経た学生がとりくむ。見学後の感想には、「授業の中で作った物や、授業で教えてもらった手遊びを子どもの前でやってみたいと思った。」「子どもについての知識や遊びのレパートリーが少ないので、2 月までに色々なことを覚えて活動に参加したい。」などと書かれてあった。2015 年度の活動と比べ、見学だけ

ではあるが事前に活動の場を自ら確認することによって彼らのとりくみやモチベーションはどのように異なる姿を見せるのか興味深い。初めての場で活動を行うよりも、場を知っているという安心感の中で活動できるはずである。また、早い段階でげんき館の活動に関心をもつことで、新しいことへとりくむ意欲につながることを期待する。学生にとって有意義であったと思われる前期の見学が、後期の活動にどのように反映されるのかを観察し、今後の検討材料としたい。

今回の研究を通し、やはり経験を重ねることの重要性があらためて浮き彫りになった。しかし、学生の反省にも見られたように、自主的に参加したにもかかわらず、準備不足で活動にのぞんだ学生もいた。今後は、自主的な活動へと学生を導く指導について、教員間の授業連携も必要であろう。さらに、学生の感想から、教科間の連携が必要かつ重要であると再確認できた。教科間の連携は、教員間の問題である。授業連携に加え、一層教員間の連携を深めることを心がけたい。

また、養成校に期待されることは、現場に即した学びであろう。子ども、保護者、地域の人たちなど、生きた人に相対する彼らには、やはり生きた人と関わる機会をより多く準備する必要がある。物理的な問題から、実践を通して子育て支援を体験することは困難である。しかしそのことを理解したうえで、養成校としてまずはより多くの活動の場を準備できないかを考える必要があろう。

5. おわりに

座学の中では、地域子育て支援が保育者に欠かせない職務として位置づけられていることや、支援活動を行う社会的背景について学習する。しかし、保育者養成校において、いかに実践的な子育て支援力を学生時代に育むことができるかが大きな課題となっている。座学だけではなく、多岐にわたって学ぶことこそが、実践的な子育て支援力を育む近道だと考える。そのためにも、保育者を目指す学生が、実際に子育て支援の活動に携わる意義は大きいといえよう。

学生によっては、自主的に大学生生活の 4 年間を通して保育者を目指すための活動にとりくんでいる。しかし、学生の自主的な取り組みに委ねるばかりでは、4 年間の積み重ねを考えるとずいぶん格差が生

じてしまう。

そのことから、養成校が自ら子育て支援活動を行うことによって、学生がいつでも活動できる環境を提供できたならば理想的である。知識として学ぶことはできても、実体験する機会を準備することは困難である。実践力をまさに大学就学中に修得できるようにすることを目指したい。

何事も、経験は彼らに多くのものを残す。そして彼らの中に残ったものが、その後の彼らを支える糧となる。養成校でのとりくみは、いかにその経験を積ませることができるかにかかっている。

引用文献

- 1) 厚生労働省：保育所保育指針の改定に関する中間とりまとめ（４）保護者・家庭及び地域と連携した子育て支援，<http://www.mhlw.go.jp/stf/shingi2/000-0132740.html>（閲覧日 2016 年 9 月 1 日）

参考文献

神田伸生 高橋貴志編著：『子どもの生活・環境・遊びに向き合う』萌文書林（2013）

注

- 1) 澁谷：「“子育て支援”教育のかかえる問題と問題解決への提案 -養成校におけるとりくみからみえたもの-」『ぎふ民俗音楽』98, 2-5（2013）参照
- 2) 澁谷・古川：「“子育て支援”に関するとりくみ（1）-養成校の現状-」『愛知学泉大学・短期大学 研究論集』48, 59-66（2013）参照
- 3) 澁谷・古川：「養成校の“子育て支援”教育」『ぎふ民俗音楽』100, 2-5（2014）参照
- 4) 前掲 1）p2 参照